



【一般的な尿検査について】 ～ 腎臓から尿道までの病気を調べます ～

✓ **検査に必要な尿の量は？**

通常の検査では、尿は最低 10ml 必要です。尿コップ内側にある目盛の『25』の少し下くらいまであれば、十分検査できます。より詳しい検査をする場合は、50ml くらい(50の目盛)が必要です。これは主に、泌尿器科を受診する患者さんに当てはまります。通常の尿検査(尿定性、尿沈渣)は、尿を提出してから 30 分程もあれば結果が出ます。



✓ **検査の始まりは、まず目で見て確認**

尿が検査室に提出されると、まず色調と濁り具合を見ます。これが検査の始まりです。尿は通常、淡黄色～橙色の透明です。尿が赤い色であれば、尿に血液が混ざっている“血尿”が最も考えられます。ビタミン剤を飲んでいれば蛍光のような黄色になります。尿が濁っている場合は、尿の中にいろいろな成分がたくさん混ざっていると考えられます。どのような成分がどのくらい混ざっているのかは病気によって違うので、尿沈渣(にょうちんざ)という検査をして分類します。

✓ **尿中の有形成分を調べる‘尿沈渣’とは・・**

尿沈渣という検査は、尿 10ml を遠心分離機にかけ(1500 回転、5 分間)、沈んで集まった赤血球や白血球、尿酸結晶、細胞、細菌などの有形成分を顕微鏡で観察します。どのような成分があるか分類し、どのくらい混ざっているのかカウントします。通常の尿では、成分はほとんど見られません。血尿では赤血球が多くみられ、感染症では白血球や細菌などが多くみられます。

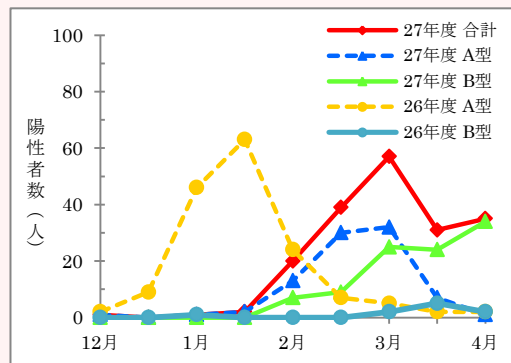


✓ **尿の細胞検査‘細胞診’とは・・**

尿沈渣よりも細胞成分をより詳しく調べる検査で、“尿細胞診”という検査があります。この検査は、尿の中に‘がん’細胞が出ていないかどうかを確認するために行います。尿細胞診検査は 5 段階で評価されます。1、2 は悪性所見なし、3 は疑陽性(悪性の疑い)であり、4、5 では悪性所見が強く疑われます。しかし、‘がん’があっても尿細胞診検査で異常を認めないこともあるため、検査の結果が陰性であるからといって‘がん’がないとはいえません。ほかの検査と併せて判断します。結果が出るまでは 1 週間くらいかかります。(山沖)

◆ **当院での‘インフルエンザ発生状況’の報告**

今シーズンに当院でインフルエンザ迅速検査を行い、陽性となった患者さんの数の推移を提示します。平成 27 年 12 月 8 日に今季初めて検査陽性患者さん(A 型)を認めましたが、1 月末までは 3 名の陽性患者さんを認めるのみでした。その後、2 月初旬より陽性例が増え始め、2 月中旬頃から急増し**昨シーズンより 1 ヶ月程度遅く 2 月末から 3 月初旬にピークを迎えました。**また、今季は A 型陽性例に連動して B 型の陽性例が増加し始め、3 月 9 日頃には A 型の陽性数を上回りました。4 月下旬以降も B 型の陽性がポツポツとみられ、完全に終息はしていませんので引き続き気を付けましょう。(加用)



★ **マイコプラズマ感染症の迅速検査**

マイコプラズマ感染を確認するための便利な迅速検査を昨年 12 月より院内で開始しています。マイコプラズマは、マイコプラズマ・ニューモニアエという名前の病原体で、肺炎の 10～20%程度に原因するとされています。5～14 歳の年齢に多いといわれていますが、成人にも乳幼児にも感染し、発熱と強い咳が特徴です。マイコプラズマには通常外来で処方されることの多いセフェム系抗生物質が効きません。逆にマイコプラズマに効果のあるマクロライド系抗生物質は細菌に対する効力が弱いのです。症状を起こしている病原体がマイコプラズマなのか、細菌なのか、ウイルスなのかは治療を行っていく上で問題となります。迅速検査は綿棒で喉のぬぐい液を採取して約 15 分間で結果が分かかります。診断には、流行状況、患者さんの年齢、ご家族に症状がないか? など、症状や検査結果を加味した上で総合的な判断がされます。(前田)



〈**わが検査室のスタッフ紹介**〉 地域の医療に貢献すべく、‘確かな知識と技術’をモットーに頑張っています・・

血液検査 前田祐仁	細菌・輸血検査 加用清美	生理検査 島崎志保	生化・免疫検査 下村明子	一般検査 山沖亜衣

【検査ぶちニュース】

★ **新規採用職員に対する教育の一環としての院内オリエンテーションへ、検査部門も参画しました。新しい仲間と円滑な業務の遂行に努めるべく取り組みます。**